



第187号

発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主 な 内 容

- ② 新任あいさつ
- ③ 校友会・KMS・FUNDだより
- ④ 平成27年度京大関係病院長協議会定例総会
書評「米軍医が見た占領下京都の600日」
- ⑤ 支部だより 三重 阪神 福岡・佐賀
- ⑥ 支部だより 福井
- 人事異動・会員計報

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

芝蘭会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。本年も何卒よろしくお願いいたします。

医学部の教育改革

専門医の育成、勝負の年

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

6月6日には芝蘭会総会・評議員会・理事会を開催し、稲垣暢也医学部附属病院長以外の副会長の選挙を行い、相馬俊臣常任理事が副会長に選出され、引き続き常任理事としての選挙を行い、菊池晴彦理事が常任理事に選出されました。新執行部におきまして、芝蘭会運営を推進してまいりますので、引き続きのご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

新年のあいさつ

芝蘭会会長



上本 伸二

仕事量が増え、増加するといふ変化が起きます。指導という手厚い教育システムなので大学病院だけでなくクリニックで行うことはできず、関係病院長の多大な協力の上で成り立っています。日々の忙しい診療の中での教育指導は大変であります。が、将来の研修医指導体制の向上、ひいては関係病院長の医師数の増加につながるものなので、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

仕事量が増え、増加するといふ変化が起きます。指導という手厚い教育システムなので大学病院だけでなくクリニックで行うことはできず、関係病院長の多大な協力の上で成り立っています。日々の忙しい診療の中での教育指導は大変であります。が、将来の研修医指導体制の向上、ひいては関係病院長の医師数の増加につながるものなので、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

仕事量が増え、増加するといふ変化が起きます。指導という手厚い教育システムなので大学病院だけでなくクリニックで行うことはできず、関係病院長の多大な協力の上で成り立っています。日々の忙しい診療の中での教育指導は大変であります。が、将来の研修医指導体制の向上、ひいては関係病院長の医師数の増加につながるものなので、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

最新設備の新病棟完成

生活習慣病・膠原病など対応



体内時計に依りて光を朝・昼・夜で自動調整する照明も備えた新病棟



屋上のヘリポート

【新病棟の特徴】

●糖尿病や脳卒中、腎臓病、歯周病などの生活習慣病をはじめ、眼・耳・鼻・皮膚や神経・骨・関節・筋肉といった感覚器や運動器の病気、膠原病などをかかえた患者さんに対応した病棟

●最新の設備を備え、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士などの様々な医療スタッフが連携して患者さんのケアにあたり、患者さんだけでなくご家族にも安心していただける病棟

●病棟の機能強化の推進、災害時の対応等を想定したヘリポートを屋上に整備した病棟
【フロア構成】
新病棟では、個室が126室、4床室が72室と、全体414床のうち30%が個室となっており、プライバシーに配慮した療養環境を実現しています。また、病室は、個室20㎡、4床室44㎡の広さを確保しており、照明には人間が持つ体内時計（生体リズム）に応じた光を朝・昼・夜で自動調整するサーカディアンライティングシステムをすべての病室で採用しています。起床前より徐々に明るくなる光で爽やかな目覚めを促し、日中は外光に近い明るく白い光で活動的な雰囲気、夜間は電球色の光で落ち着いた

●機能の充実とアメニティの向上
●高度先端医療を支える施設
●快適な医療空間を創造
●柔軟性を確保（フレキシビリティ）を持った構造
●エネルギー使用量の削減

●最新の設備を備え、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士などの様々な医療スタッフが連携して患者さんのケアにあたり、患者さんだけでなくご家族にも安心していただける病棟

●最新の設備を備え、医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士などの様々な医療スタッフが連携して患者さんのケアにあたり、患者さんだけでなくご家族にも安心していただける病棟

新任あいさつ

平成27年10月1日付で、医学研究科神経生物学分野の教授を拝命致しましたのでごあいさつ申し上げます。私は昭和60年に東京大学医学部を卒業し、附属脳施設での大学院時代(島津浩教授、後に本郷利憲教授)と大学院4年目からのスウェーデンのイエテボリ大学のルンドバーク教授の研究室への留学、さらに帰国後の東大の出身教室での助手時代を通じて、ネコを用いて、上肢の運動や、眼球と頭部の協調運動を制御する脳幹・脊髄レベルの神経回路の研究を行っていました。そして運動の各要素に対応する機能モジュー

研究室に移り、海馬の抑制性介在ニューロンのグルタミン酸受容体の分子生理学的特性を解明する研究に飛び込みました。そして2年余りが経過し、この競争の激しい分野においてある程度の成果が出始めていた頃、愛知県岡崎市の国立生理学研究所以からお誘いを受け、平成8年、35歳の時に自分の研究室を持たせていただきました。そこでこれまでの研究を統合して、運動やそれに関わる認知機能について、局所回路と大域的回路の動態を行動と関連づけて解析する新しい研究を開始しました。様々な試行錯誤の繰り返り

大域的神経回路研究に期待

高次脳科学講座
神経生物学分野教授

伊 佐 正



ルを構成するニューロン群の存在を突き止めました。しかし、昭和40年代から50年代にかけて盛んに行われていた、このような大域的な回路による運動制御機構の研究は、当時、既に方法的に行き詰まりを見せていました。一方でクロニングによる機能分子の同定とその機能をシナプスや細胞レベル、さらにその遺伝子改変動物を用いて個体レベルで調べる研究。他方ではヒトの非侵襲的脳機能イメージングやサルを用いた高次脳機能研究が隆盛を誇っていました。そこで、平成5年に、師事していた本郷教授の定年退職とともに、群馬大学の小澤清司教授の研

究室に移り、海馬の抑制性介在ニューロンのグルタミン酸受容体の分子生理学的特性を解明する研究に飛び込みました。そして2年余りが経過し、この競争の激しい分野においてある程度の成果が出始めていた頃、愛知県岡崎市の国立生理学研究所以からお誘いを受け、平成8年、35歳の時に自分の研究室を持たせていただきました。そこでこれまでの研究を統合して、運動やそれに関わる認知機能について、局所回路と大域的回路の動態を行動と関連づけて解析する新しい研究を開始しました。様々な試行錯誤の繰り返り

のフロントに戻ってきました。本学では、基礎・臨床を問わず諸先生方との新しい出会いから新しい展開が始まることを楽しみにしています。また、大学の重要な役割は言うまでも無く人材育成です。まずは生理学的な視点から統合的に生体機能を見ることから出来る医師の育成。さらには在任中に1人でも2人でも、将来の日本の科学研究を担うような研究者の育成に携わることができればと願っています。やや臺の立った新任教授ですが、今後とも芝蘭会の先生方におかれましては、何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

魅力的な耳鼻咽喉科作りへ

大学院医学研究科

耳鼻咽喉科
頭頸部外科学教授

平成27年10月1日付で、京都大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の第8代教授を拝命しましたので、芝蘭会会員の皆様にごあいさつ申し上げます。

私は昭和60年に京都大学医学部を卒業後、耳鼻咽喉科学教室(本庄巖教授)に入りました。倉敷中央病院で研修し、京都大学医学部外科系大学院で学位を取得後、ニューヨークのLenox Hill Hospitalに平成5年から2年間留学しました。世界の中心での生活、家族共有の時間、今までで一番楽しい時代でした。若手には是非留学をおすすめします。この時に、セミクロードのアメリカ国内学会Combined Otolaryngological Spring Meetings (COSM)に出会いました。COSMの演題採択率は2-3割で、耳鼻咽喉科の臨床で世界トップの学会であることがわかりました。ここを目標に臨床、研究を続けてきました。

私の臨床の原動力になっています。大学院の頃から再生医学研究所の中村達雄先生にお世話になり、人工気管、人工喉頭に関する仕事を始めていました。平成14年に京都大学の講師となり、First humanとして人工気管による気道再建手術を行い、この仕事がライフワークとして続いています。

平成15年に福島県立医科大学教授に就任し、気道再生の研究を立ち上げ、毎年教室員は英文誌で学位を取得し科学研究費にも採択されるようになりました。新たに、新生児の聴覚スクリーニングや先天性サイトメガロウイルス感染による聴覚障害研究、高齢者の健康長寿にかかわる嚥下障害のチーム医療や誤嚥性肺炎のスクリーニングに取り組んできました。

平成23年3月11日、東日本大震災が発生しました。当時、副院長長をしており、マニュアルは全く役に立たず、超緊急時に何をするか？まず災害対策本部(災害医療対策部)を立ち上げました。原発周辺の病院から約1300名の患者が避難し、搬送の中継基地として大いに機能しました。放射線の恐怖に立ち向かうまるで戦場のような状況でした。この続きはまた別の機会に。

京都大学におきましては、まず臨床では患者の視点を考え安全を重視した標準治療やチーム医療

次世代を託せる人材を育成

大学院医学研究科
消化器内科学教授

妹尾 浩



平成27年12月1日付で京都大学大学院医学研究科消化器内科学の教授を拝命しましたので、芝蘭会会員の先生方にごあいさつ申し上げます。

私は、平成3年に京都大学医学部を卒業し、京都大学医学部附属病院で1年間内科研修の後、倉敷中央病院内科、静岡県立総合病院消化器科で、臨床研鑽を積んで参

りました。その後、京都大学に新しく開設された消化器内科学(千葉勉教授)の大学院2期生として、消化器の臨床と研究に同時に接する機会を与えられました。そして、

東京大学薬学部遺伝学講座、京都大学遺伝学講座(ともに武藤誠教授)で主にマウスモデルを用いた腸発癌メカニズムの研究に従事させて頂きました。また、平成17年から米国ミズーリ州セントルイスのワシントン大学病理免疫学講座(Thaddeus Stappenbeck教授)で腸管免疫の研究に加わりました。帰国後、消化器

内科医としての臨床を継ぎ、平成25年からは京都大学医学部附属病院内視鏡部副部長を務めさせて頂きました。また、広く消化器臓器を対象として、癌幹細胞および癌微小環境に関する研究を行って参りました。

消化器内科は、内科領域の中でも技術を重視する診療分野のひとつです。対象とする臓器は食道、胃腸、肝胆膵と多岐にわたり、領域も炎症、免疫、機能的疾患、癌など実に多彩です。これだけの範囲をカバーする技術と知識を両立させながら、急速に高度化、細分化する消化器診療に対応するためには、多数の優れた人材を育成し、その力を結集することが欠かせません。そのうえで、ひとつの疾病、ひとつの患者さんを複合的な視点から診ることが出来る環境を形成することが重要と考えま

います。今後とも、芝蘭会の先生方におかれましては、何卒ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

再就職のご相談は

“滋賀県ドクターバンク”

検索 まで！！

滋賀県ドクターバンクでは、滋賀県内の病院等での就業をお考えの医師の皆さまに、条件に合う求人病院等を紹介しています。



滋賀県イメージキャラクター キャップイー

ご登録

求人紹介

病院等の
見学・面談

ご就業

ご登録からご就業までサポートさせていただきます
まずはドクターバンクHPからご登録ください！！

滋賀県ドクターバンク
(滋賀県医師キャリアサポートセンター)
〒520-8577 大津市京町四丁目1番1号
滋賀県庁健康医療課内
TEL:077-528-3613 FAX:077-528-4859
E-mail:ef00070@pref.shiga.lg.jp

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金 (KMS・FUND) だより

事務局
〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学大学院医学研究科・
医学部 管理棟 1F 総務掛内
Tel.075-761-2467
Fax.075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

第8回校友会総会・講演会開催

KMS・FUND委員長
病理診断学分野教授

羽賀博典



第8回 校友会総会・講演会にて行われた講演会の内容をご紹介します。2名の医学研究科の先生方と、特別講師の先生1名からご講演をいただきました。

第8回 校友会総会・講演会にて行われた講演会の内容をご紹介します。2名の医学研究科の先生方と、特別講師の先生1名からご講演をいただきました。



講演する高橋先生

「神経系の一部である網膜も再生させることができるはず」という確信を得た、と現在の研究のきっかけをお話しされました。研究を始めた今から約20年前は「再生医療」という言葉も概念も存在せず、周囲から網膜の再生は無理、といった批判を浴びたそうです。数年の後、高橋先生がβの細胞から網膜の分化誘導に成功し、さらにβの細胞で網膜を作れるようになったことも、臨床応用に否定的な批判が続いたとのことです。それにもかかわらず、研究から実用化まで最短距離を走ってこられたことは驚嘆に値します。「患者さんのニーズが何かを知る」「普通の治療にするために、マーカーを調べる」といったキーワードを交えて、基礎

平成27年9月26日に開催された第8回校友会総会において、第4回京都大学医学部校友会賞の表彰式を行いました。平成26年9月からの課外活動

「神経系の一部である網膜も再生させることができるはず」という確信を得た、と現在の研究のきっかけをお話しされました。研究を始めた今から約20年前は「再生医療」という言葉も概念も存在せず、周囲から網膜の再生は無理、といった批判を浴びたそうです。数年の後、高橋先生がβの細胞から網膜の分化誘導に成功し、さらにβの細胞で網膜を作れるようになったことも、臨床応用に否定的な批判が続いたとのことです。それにもかかわらず、研究から実用化まで最短距離を走ってこられたことは驚嘆に値します。「患者さんのニーズが何かを知る」「普通の治療にするために、マーカーを調べる」といったキーワードを交えて、基礎

最後に、特別講演の講師である高橋政代先生にお話しいただきました。高橋先生は理化学研究所多細胞システム形成研究センター網膜再生医療研究開発プロジェクトのプロジェクトリーダーで、世界で初めてβの細胞を患者に移植することに成功しマスコミで大きく報道されました。高橋先生は京都大学医学部を卒業された後、眼科医となられました。ご主人と娘さんたちと共に留学のため渡米された際に「神経幹細胞」が存在するとい

医学部 ESS、スキー、ラグビー部 3 団体に校友会賞



校友会賞を受賞する3団体

報告書を、生活課外活動支援委員会検討した結果、今年度は文科系で医学部ESS、体育系でスキー部とラグビー部の計3団体に授与する事に決まりました。スキー部は、関西

この度は、KMYIAを頂きまして光栄の至ります。研究や論文執筆にあたり、ご指導頂きました松田道行教授、坂井義治教授をはじめ、研究室の皆様

「生体内」で好中球遊走観察

近年ヒトβの細胞を用いた研究は世界あちこちで盛んですが、内胚葉系の臓器の中でも特に肺に分化させる方法の開発は遅れてきました。そしてその大きな理由として、振り返ってみれば、四つの問題がありました。一つ目は肺に分化する決定因子の条件が分

医学部 研究生 [呼吸器内科学分野] (論文発表時)

後藤 慎平

胞への分化を細胞が生きている状態で検出し、単離もできるように遺伝子操作した「レポーター細胞」と呼ばれるヒトβの細胞株がなかったこと、四つ目は、II型肺胞上皮細胞には肺胞でのガス交換を助けるためのサーファクタントを蓄積する「ラメラ体」という構造がありますが、βの細胞から分化したII型肺胞上皮細胞ではなかなか再現できなかったことが挙げられます。今回の論文発表は、これら四つの問題を取り上げてそれぞれ解決できたという内容です。この研究により、ヒトβの細胞からII型肺胞上皮細胞を低効率ながらも分化させて単離できるようになり、難病の研究や臓器再生の研究に向けて一歩前進できたと考えております。



表彰を受ける後藤さん

を始めるという合理的な考え方を長船健二先生から教わり、自分で肺の分化誘導を試みましたが最初のうちは自分の経験不足もあって問題点にも気づかないまま時間ばかりが過ぎていきま

水野 礼

博士課程 医学専攻 [消化管外科学分野] (論文発表時)

今回の研究では、まず、好中球遊走に関与する分子メカニズムを「生体内で」観察する実験系を確立しました。急性腸炎を惹起させたマウスに全身麻酔をかけ、二光子顕微鏡で腸管を観察し、二光子顕微鏡は、腸管粘膜面からの粘膜下層の観察を可能にし、炎症腸管での好中球の遊走過程の詳細な観察を可能にします。今回は、細胞外シグナル制御キナーゼ (ERK) 活性を観察する

くべきことにはNSAIDsは、好中球をむしろ活性化させました。NSAIDsはプロスタグランジン (PG) の合成を阻害することによって作用しますが、この好中球活性化効果は、NSAIDsがPGの下流のEP4シグナルを阻害することによる

なる男女総合優勝を達成 収めています。それぞれの団体へのメールや学内掲示でお知らせします。各5万円を贈りました。 (校友会生活・課外活動支援委員会 川上文子)

平成27年度京大関係病院長協議会定例総会

学内外から150人参加
パネルディスカッションも

京都大学医学部附属病院では、平成27年10月30日(金)に、平成27年度京大関係病院長協議会定例総会を芝蘭会館にて開催しました。

本協議会は、同会員である関係病院長が親睦を深めるとともに、医学の進歩発達及び病院経営の合理化を企画することを目的として年1回、定例総会を開催しているものであり、学内外から150名余りの参加がありました。

定例総会では、稲垣暢也病院長及び上本伸二医学研究科長の開会あいさつ、稲垣病院長より「京大病院の現状」についての報告、桃島健治教授(皮膚科)、大森孝活発に行われたパネルディスカッション

一教授(耳鼻咽喉科)、福島光夫 特定教授(先制医療・生活習慣病研究センター)より新任者あいさつと研究・診療科等の紹介、小西靖彦教授(医学研究科附属医学教育推進センター長)より臨床実習について報告が行われました。さらに、新専門医制度の進捗状況として、内科は柳田素子教授(腎臓内科)、外科は上本伸二医学研究科長(肝胆膵・移植外科教授)、整形外科は松田秀一 副病院長(整形外科長)からそれぞれ報告が行われました。その後、小西靖彦教授をコーディネーターとして、稲垣病院長、柳田教授、上本医学研究科長、松田副病院長によるパネルディスカッションが実施されました。

また、定例総会終了後に開催された懇親会において、出席いただいた関係病院の先生方と本院の先生方による活発な情報交換が行われ、大変有意義なものとなりました。



開会のあいさつをする稲垣病院長(左)と上本医学研究科長



書評

二至村 菁 著

『米軍医が見た 占領下京都の600日』

本書をはじめて目にしたのは、2015年12月6日の朝日新聞の書評欄

においてであった。京都の終戦直後の医療史的な要素があり興味を引いた。その数日後に、『芝蘭会報』への書評掲載のご依頼を、二至村菁氏ご本人から芝蘭会報編集委

談がなかった。

二至村氏は、占領時代のGHQによる医学関係の検閲文書をテーマとして研究しているトロント大学の研究者であり、文書を検討する中で、日野原先生関連の文書が多数あることから、その関係でのインタビューを契機として、私淑しておられるとの事であった。さらに、「研究者が作家か」の質問に対して、ご本人はきっぱりと、「研究者」とご回答された。また、

医学研究科
環境衛生学分野 教授
小泉 昭夫

■ 評者

資料多数駆使、冷静・公平な目



京大研究者らの熱い思いに感動

た。グリスマン軍医の記録には、当時の京都府下の病院のみならず貧しいながらも活気に満ちた府民の生活の様子や、進駐軍の周辺で働く若い男女の物語が、エピソード風にちりばめられ、当時高価なカラーフィルム写真が華を添えている。彼は、義務兵役のため来日したため、レジデントは未習で、日本への赴任を契機に公衆衛生の道を歩む決意をする。サムス准将の推薦状で、Harvard大学の公衆衛生大学院に入學し、公衆衛生の専門家として、その後長く国際的な専門機関で働くことになる。

その一方横糸として、重い話題が同時代の流れとして語られる。サムス准将のインタビュー、GHQによる原爆投下後の初期の広島・長崎の日本側医学的報告の検閲、731部隊についての故岡本耕造名誉教授のご子息のインタビュー、隔離政策下でのハンセン病患者の状況が、多くの資料を駆使して淡々と語られ

え、戦争で日本人と戦った経験がないため日本人への憎しみがなく、フットワークの軽い若い軍医たちを地方に送り込んだ。京都には、インスターを終えたばかりの新米グリスマン軍医が送り込まれ、気さくな性格と、的確で因習にとられない合理的な指導に、京都府知事以下、市長、府衛生部の部課長クラスの医師達は、初期の警戒感を捨て協働することになっ

員長の高折先生を通していただき、書評をお引き受けすることにした。標題と帯を見て、関連して次々に疑問が湧いてきた。何故戦後医療史に興味があるのか、帯に推薦文を書かれている日野原重明先生とのつながりは、研究者か作家か、さらに登場人物のグリスマン軍医とのつながりは。ともあれ献本のため来室してくださるというので、二至村菁氏との面

からの情報を得たのと。さらに、グリスマン軍医は、サムス准将の直属の部下であることもわかり、なお一層興味深く感じた。

サムス准将は、社会医学者には知名度が高く、戦後日本の医療制度を大きく変えたGHQの局長である。ざっくりいえば、日本をドイツ医学から米国医学に代えた張本人である。有名な事績として医専の廃止、予防接種制

芝蘭会費納入は
自動振替で

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。

ぜひ、ご利用いただきたくお願い申し上げます。

手続き等については、
芝蘭会事務局
(TEL 075-751-2713)
までお問い合わせください。

「京都大学医学部記念講堂・歴史資料館基金」募金の現状

平成28年1月29日(金) 現在

・「三井住友銀行」利用のご寄付

310人(法人を含む)

56,290,000円

うち、50万円以上のご寄付は56人(法人を含む)

・「ゆうちょ銀行」利用のご寄付

251人

5,967,000円

うち、50万円以上のご寄付は2人

計561人(法人を含む)

62,257,000円

HQによる原爆投下後の初期の広島・長崎の日本側医学的報告の検閲、731部隊についての故岡本耕造名誉教授のご子息のインタビュー、隔離政策下でのハンセン病患者の状況が、多くの資料を駆使して淡々と語られ

著者の目は、あくまで冷静・公平である。サムス准将に焦点を当てる一方、レッドバードで追われた者たちについても目を向けている。研究者であると回答されたことも腑に落ち、あらためて敬意を表したい。さらに、

る。とくに、サムス准将の「どっかの国が、細菌戦をやれる技術をあみ出したとか、そう聞けば自分たちを護らねばならん。そして反撃せねばならんのだ。それが戦争というものだ。」の言葉は重い。また、ハンセン病の隔離政策を何とかしたいという、グリスマン軍医と京大の研究者たちの熱い思いは、こちらの胸も熱くする。

近代医学史にとって空白の時代であり、本書は研究書、医学概論の入門書としても貴重であり、医学生・看護学生から医師・看護師まで幅広く共感を得ると信じる。

(藤原書店・2015年9月刊 3600円)

支部だより

肥満などの研究紹介



クアウトするのではなく、 α と β の基質の結合を阻害し、その機能を半減させることで実験を行ったそうです。そのようにして生まれた α 機能低下マウスは、 α などの炎症性サイトカインの産生が低下して炎症が起これにくくなっており、また体重が少し軽いうことが分かりました。更なる研究で単に体重が軽いだけでなく、脂肪細胞の大きさが小さく、耐糖能試験の結果も優秀であることが分かりました。

のように緒方先生の研究がさらに進めば、肥満や生活習慣病といった現在の我々の多くを苦しめている疾病が脅威ではなくなるのかもしれない。

記念講演の後、京都大学大学院医学研究科上本伸二先生による京都大学医学部現況報告がなされ、病棟の改築の様子などをお伝えくださいました。上本先生は続けて「外科医の育成と専門医制度」という講演をしてくださいました。医学部の定員を増やすことで、新人医師の数は増やすことができたが、それに伴い女性医師が増加して

り、結婚出産などを機にリタイアする医師が増加し、働く医師を増やすことができないという現状です。麻酔科医が増えているにもかかわらず、現場では麻酔科医が不足しているという象徴的な事象にも触れながら、このことを解決するために社会を変えていかなければならないと上本先生はおっしゃっていました。実際にアメリカでは新人医師の5割、ドイツでは7割が女性らしく、彼女たちの活躍によって医師不足に陥ることはないそうです。

その後記念写真撮影が行われ、続いてグリーンパルクみやびにて懇親会が行われました。先生方は学生である私にも気さくに話してくださり、学生時代の思い出や現在と昔の医療がどのように違うのかなどといった貴重な話をたくさん伺うことができました。

会には終始和やかな雰囲気が進められ、皆さん非常に楽しんでいるように見受けられました。最後になりましたがこのように貴重な会にお招き下さったことに感謝の意をもって三重支部総会の報告を終わらせていただきます。(文責：5回生 宮崎規晶)

痛の有無や可動性の有無が鑑別のポイントとのことでした。僕は春学期にちょうど血液内科の授業を終えたばかりでしたので、スムーズに理解することができました。

最後に、京都大学大学院医学研究科血液・腫瘍内科学教授の高折晃史先生による医学部の現状報告と学術講演がなされました。現状報告では、大

つたです。まず初めに、血液内科についての基本的な説明がありました。血液内科とは、一般に白血病とリンパ腫を主として扱う科で、血液検査が必須であり、診断から治療までが一貫している総合診療的な一面があります。また、血液内科医の現状としては、専門医の数は京都が一番多く、兵庫は人数という面では一見すると多いように思えるが、人口当たりで見ると少なく、また地域格差があるとのこと、血液内科医の数は全国的に足りていないとのことでした。続いて、高折先生の研究分野であり、先進国であるにもかかわらず、まだ日本でも増加しているエイズの話に移りました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

平成27年7月19日(日)、アクト津にて、芝蘭会三重支部総会が開かれました。富本秀和先生の進行のもと、いくつかの報告事項があり、より三重支部を活性化させるためにできることはないかなど

が肥満と耐糖能に關与していることが分かったそうです。つまり α は肥満を起しやすくし、また慢性的な炎症を起しやすくし、耐糖能の低下を起こして2型糖尿病を起こしやすくなります。また、肥満自体も慢性炎症を引き起こし、その慢性炎症は2型糖尿病やメタボリックシンドローム、がんや動脈硬化などの原因となるということが知られており、この α はこれらの現在の社会にとつて重要な疾病をさまざまな方法で引き起こしているシグナル分子なのだそうです。前述の通り、 α は生存に重要な機能を持っていることもわかっていて、ヒトの α 機能は阻害することは簡単にはできないそうです。しかし現在では、樹状細胞やマクロファージの α だけをノックアウトしても耐糖能、肥満、そして炎症に対して十分な効果があることが分かっているらしく、こ

のようにつながりま

世界で40例しか確認されていない常染色体劣性遺伝の疾患で、多数の異所性モザイク染色体を認めるものです。実際に西谷先生が受け持つ患者さんの症例報告がなされました。PCS/MVAの診断、治療について実例をあげながら詳しく説明してくださいました。また、病因遺伝子についてもBUBR1の関連が示唆されているということが図を交えて説明されていました。

三つ目の講演は渡邊光正先生による「日常疾患にひそむ血液疾患」でした。赤血球、白血球、血小板、の3項目について異常値の範囲、疑われる代表的な疾患についてフローチャートを用いて丁寧に説明してくださいました。特に、血小板減少において出血症状を認めるものは緊急を要するので、注意が必要とのことでした。また、悪性リンパ腫についても説明されており、圧

痛の有無や可動性の有無が鑑別のポイントとのことでした。僕は春学期にちょうど血液内科の授業を終えたばかりでしたので、スムーズに理解することができました。

最後に、京都大学大学院医学研究科血液・腫瘍内科学教授の高折晃史先生による医学部の現状報告と学術講演がなされました。現状報告では、大

つたです。まず初めに、血液内科についての基本的な説明がありました。血液内科とは、一般に白血病とリンパ腫を主として扱う科で、血液検査が必須であり、診断から治療までが一貫している総合診療的な一面があります。また、血液内科医の現状としては、専門医の数は京都が一番多く、兵庫は人数という面では一見すると多いように思えるが、人口当たりで見ると少なく、また地域格差があるとのこと、血液内科医の数は全国的に足りていないとのことでした。続いて、高折先生の研究分野であり、先進国であるにもかかわらず、まだ日本でも増加しているエイズの話に移りました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

4部に分け学術講演



平成27年9月26日(土) ホテル「ホップインアミ

もつながりま

世界で40例しか確認されていない常染色体劣性遺伝の疾患で、多数の異所性モザイク染色体を認めるものです。実際に西谷先生が受け持つ患者さんの症例報告がなされました。PCS/MVAの診断、治療について実例をあげながら詳しく説明してくださいました。また、病因遺伝子についてもBUBR1の関連が示唆されているということが図を交えて説明されていました。

三つ目の講演は渡邊光正先生による「日常疾患にひそむ血液疾患」でした。赤血球、白血球、血小板、の3項目について異常値の範囲、疑われる代表的な疾患についてフローチャートを用いて丁寧に説明してくださいました。特に、血小板減少において出血症状を認めるものは緊急を要するので、注意が必要とのことでした。また、悪性リンパ腫についても説明されており、圧

痛の有無や可動性の有無が鑑別のポイントとのことでした。僕は春学期にちょうど血液内科の授業を終えたばかりでしたので、スムーズに理解することができました。

最後に、京都大学大学院医学研究科血液・腫瘍内科学教授の高折晃史先生による医学部の現状報告と学術講演がなされました。現状報告では、大

つたです。まず初めに、血液内科についての基本的な説明がありました。血液内科とは、一般に白血病とリンパ腫を主として扱う科で、血液検査が必須であり、診断から治療までが一貫している総合診療的な一面があります。また、血液内科医の現状としては、専門医の数は京都が一番多く、兵庫は人数という面では一見すると多いように思えるが、人口当たりで見ると少なく、また地域格差があるとのこと、血液内科医の数は全国的に足りていないとのことでした。続いて、高折先生の研究分野であり、先進国であるにもかかわらず、まだ日本でも増加しているエイズの話に移りました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

医学部の現況報告も



平成27年10月2日(金)、リーガロイヤルホテル小倉にて、芝蘭会福岡・

内容について紹介させていただきました。最近、京都大学は教育方法の改善に力を入れていて、積極的に授業の出席をとるようになりました。新任教授は5名いらっしゃいましたが、その内一人である医学教育推進センター教授のShohab Youssseian先生は、平成26年度から京都大学医学部医学科の一回生に英語でbiochemistryをお教えになっています。

医学部医学科の入試では、平成28年度から定員5名の推薦入試を実施します。大学院医学研究科の入試では、定員を同じく平成28年度から約30名増員し、170名程度にします。

研究面については、臨床研究総合センター、メデイカルイノベーションセンター(MIC)棟、ES細胞研究所が建設されました。メ

1棟は、経済産業省による約15億円の補助金によって建設された、創業に特化したオープンイノベーション施設です。臨床面については、患者のための新病棟「南病棟」が建設される予定であり、8階建てで、約400床を有し、ヘリポートが設置されます。また、南病棟を取り壊し、新病棟「第二期病棟」が建設される予定です。

医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)は、平成27年8月現在、約2000人による出資で約3億8千万円集まっており、その2分の1をMVCにより医学部学生会館が建設されました。医学部学生会館には各部活の部室と、自習室が入っています。また、京都大学医学部校友会では、保護者を対象に入学・卒業の祝い、講演会などを行うことで、これまで山中伸弥先生や茂木健二郎先生といった先生た

生が研究なさっているのは、ERKとp38で今回はp38についてお話しくださいました。p38は胎盤形成に必要なシグナルであり、それ以外にもまだ詳しくはわかっていませんが生存するために重要な役割を持っていることが分かっているそうです。そのためノックアウトしてしまうとマウスが死亡するので、ノッ

のようにつながりま

世界で40例しか確認されていない常染色体劣性遺伝の疾患で、多数の異所性モザイク染色体を認めるものです。実際に西谷先生が受け持つ患者さんの症例報告がなされました。PCS/MVAの診断、治療について実例をあげながら詳しく説明してくださいました。また、病因遺伝子についてもBUBR1の関連が示唆されているということが図を交えて説明されていました。

三つ目の講演は渡邊光正先生による「日常疾患にひそむ血液疾患」でした。赤血球、白血球、血小板、の3項目について異常値の範囲、疑われる代表的な疾患についてフローチャートを用いて丁寧に説明してくださいました。特に、血小板減少において出血症状を認めるものは緊急を要するので、注意が必要とのことでした。また、悪性リンパ腫についても説明されており、圧

痛の有無や可動性の有無が鑑別のポイントとのことでした。僕は春学期にちょうど血液内科の授業を終えたばかりでしたので、スムーズに理解することができました。

最後に、京都大学大学院医学研究科血液・腫瘍内科学教授の高折晃史先生による医学部の現状報告と学術講演がなされました。現状報告では、大

つたです。まず初めに、血液内科についての基本的な説明がありました。血液内科とは、一般に白血病とリンパ腫を主として扱う科で、血液検査が必須であり、診断から治療までが一貫している総合診療的な一面があります。また、血液内科医の現状としては、専門医の数は京都が一番多く、兵庫は人数という面では一見すると多いように思えるが、人口当たりで見ると少なく、また地域格差があるとのこと、血液内科医の数は全国的に足りていないとのことでした。続いて、高折先生の研究分野であり、先進国であるにもかかわらず、まだ日本でも増加しているエイズの話に移りました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

も気さくに声をかけて下さいました。阪神支部は灘高校出身の先生が多く、同校出身の僕に母校のお話をしてくださる方がたくさんいました。また、薬の量は昔は大きな錠剤を20錠ほど服用する必要があったのに対し、現在はわずか1錠で済むとのことでした。最後に、京大血液内科での最新の研究についてのお話がありました。HIVについての研究や、CD4細胞を用いたMD5研究、がんの細胞免疫療法など、非常に興味深い研究が紹介されました。

支部会員の研究発表



【福井】

平成27年8月8日（土）、ホテルフジタ福井内にありますザ・グランユニアーズフクイにて、平成27年度芝蘭会福井支部総会が、支部長である野口正人先生による議事進行で行われました。はじめの野口支部長のあいさつは、病院を取り巻く現在の状況の厳しさに

のことでした。よってリボソームと同じように内部に医薬品を収容したDDSキヤリアとして両親媒性高分子が使われるというお話でした。その上で、両親媒性高分子の組成を変えることで硬さやミセル半径を変える工夫や、応用例などのお話が続きました。

次に、福井赤十字病院神経内科部長、脳神経センター長の高野誠一郎先生による「痙性斜頸のボツリヌス治療」という研究発表に移りました。先生の講演は、まず、痙性斜頸とは局所性ジストニアという神経疾患の一つであるということや、その症状の性質や発症者の特徴などの説明から始まりました。その後先生は、痙性斜頸の症状である頭位偏倚にはいろいろな種類があり、症状の程度を筋電図で計測し、どこにどの程度の治療を施すかは患者さんごとで異なるということをいくつかの例を示して説明してくださいました。この治療がボツリヌス治療であり、それはA型とB型の2種類の注射の内一方を適所に適量打つというものでした。また、先生が勤めていらっしゃる病院でのボツリヌス治療には、現在合計27回もの治療実績があり、先生はそれが北陸随一であるとお話しになりました。

続いて特別講演があり、「食物アレルギーの病態と新規治療を目指して」という題目で、福井大学医学部病態制御医学講座小児科教授の大嶋勇成先生がお話しになりました。アレルギーの診療では、多くの食物についてアレルギーの陽性基準を超えている患者さんはそれについて他のアレルギー症状を示さない食品についてもアレルギーの陽性基準を超えてしまい、結果として無駄に除去品目数を増やしてしまうという過ちが起こると先生はじめに話されました。また、福井県のアレルギーへの認識が甘いと指摘なさり、各医療機関の食物アレルギー診療の対応状況についての表を紹介なさいました。続いて、子供のアレルギーの治療法についての話しに移られ、経口投与治療について先生は紹介なさいました。これは、アレルギー食品をはじめは2日に1回少しずつ増やしながらい食べ、あるところから一定量食べることを維持し、そして2週間ほど食べないでいてからもう一度食べ、症状が出なければ免疫の獲得に成功するという治療法だとのことでした。しかし、この治療中には少し症状が出ることで避けられないことや、二つ以上の食品について治療をする際、一方が治ってからもう一方の治療を始めるとなかなか治療が進まず、治った方の食品にもアナフィラキシー症状を起こしてしまうという事例があったことを先生は紹介なさり、欠点があると指摘なさいました。続いて、免疫療法という、表面にマンノースを修飾したリボソームを投与する療法にお話を移されました。OVAOMLによるものや腸間膜リンパ節（DLN）細胞が絡むもの、ビタミンDを利用するものなどがあるとのことでした。その後、ピーナッツアレルギーを例にとり、幼いころに食べさせると大きくなってからアレルギーになりにくい食品があることをお話しになり、最後にアトピーと食物アレルギーの関連についてお話しになりました。そこで先生は二重抗原曝露仮説について説明なさった後、アトピー治療を怠ると、治療をしている場合に比べ、もし不慮の事故で普段除去しているアレルギー食品を食べってしまったときにアレルギー症状がよりひどくなってしまうことをお話しになりました。

ことでした。その後、ピーナッツアレルギーを例にとり、幼いころに食べさせると大きくなってからアレルギーになりにくい食品があることをお話しになり、最後にアトピーと食物アレルギーの関連についてお話しになりました。そこで先生は二重抗原曝露仮説について説明なさった後、アトピー治療を怠ると、治療をしている場合に比べ、もし不慮の事故で普段除去しているアレルギー食品を食べってしまったときにアレルギー症状がよりひどくなってしまうことをお話しになりました。

最後に、京都大学大学院医学研究科医学教育推進センター長、教授の小西靖彦先生が「医学研究科・医学部の現状について」という題目でお話しをなさいました。先生は自身が学生であった頃の京大医学部について面白おかしく話されながら、現在の京大医学部の設備などの状況について説明なさり、学生会館や表彰の際の商品、記念講堂リフォーラムなどに使われている寄附金をさらに募っていらつしやいました。

人 事 異 動

発令年月日	氏 名		異動内容
H27.9.25	美馬 達哉	辞任	脳機能総合研究センター臨床脳生理学准教授より立命館大学大学院先端総合学術研究科教授へ
H27.9.30	内藤 素子	辞任	形成外科学講師より
H27.9.30	藤澤 章弘	辞任	皮膚科学講師より
H27.9.30	藤井 隆夫	辞任	リウマチ性疾患制御学講座特定教授より和歌山県立医科大学教授へ
H27.9.30	BROWN Ⅲ, John Ellsworth	辞任	臨床システム腫瘍学講座特定助教より医学教育推進センター特定講師へ
H27.10.1	大森 孝一	採用	福島県立医科大学医学部教授より耳鼻咽喉科教授へ
H27.10.1	伊藤 達也	昇任	臨床研究総合センター助教より同講師へ
H27.10.1	伊佐 正	採用	自然科学研究機構生理学研究所教授より神経生物学教授へ
H27.10.1	BROWN Ⅲ, John Ellsworth	採用	臨床システム腫瘍学講座（寄附講座）特定助教より医学教育推進センター特定講師へ
H27.10.1	SUGIMOTO WATANABE, Sonia Pilar	採用	社会疫学分野研究員より医学教育推進センター特定講師へ
H27.10.1	田中 真生	採用	金沢医科大学臨床准教授よりリウマチ性疾患制御学講座特定准教授へ
H27.10.31	岡田 知久	辞任	放射線医学講座画像診断学・核医学講師より脳機能総合研究センター特定准教授へ
H27.11.1	鬼頭 昭彦	昇任	皮膚科助教より同講師へ
H27.11.1	CANDEIAS, Marco Marques	採用	生命科学研究所研究員、附属病院技術補佐員より医学教育推進センター特定講師へ
H27.11.1	岡田 知久	採用	放射線医学講座画像診断学・核医学講師より脳機能総合研究センター特定准教授へ
H27.11.1	上田 佳秀	採用	臓器移植医療部特定講師より同助教へ

発令年月日	氏 名		異動内容
H27.11.30	中島 則行	辞任	神経生物学特定助教より久留米大学医学部生理学講座助教へ
H27.11.30	岩倉 浩	辞任	メディカルイノベーションセンターTK特定准教授より和歌山県立医科大学第一内科講師へ
H27.11.30	西山 慶	辞任	初期診療・救急科講師より京都医療センター救命救急センター長へ
H27.12.1	本田 哲也	採用	次世代免疫制御を目指す創薬医学融合拠点特定准教授より皮膚科学講師へ
H27.12.1	妹尾 浩	昇任	消化器内科学講師より同教授へ
H27.12.1	石守 崇好	昇任	画像診断学・核医学助教より同講師へ
H27.12.1	曾根 正勝	採用	糖尿病・内分泌・栄養内科特定講師より寄附講座（代謝制御学講座）特定准教授へ
H27.12.1	足立 隼	採用	徳島大学非常勤講師より附属総合解剖センター特定研究員へ
H27.12.31	山城 健児	辞任	眼科学講師より大津赤十字病院眼科部長へ
H27.12.31	孫 徹	辞任	メディカルイノベーションセンターTK特定准教授より国立循環器病研究センターオミックス解析推進室長へ
H27.12.31	佐藤 格夫	任期満了	救急部講師より救急部准教授へ
H27.12.31	川口 淳	辞任	臨床研究総合センター准教授より佐賀大学医学部教授へ
H28.1.1	大音壮太郎	採用	眼科学特定講師より同講師へ
H28.1.1	大鶴 繁	昇任	病院初期診療・救急科助教より同講師へ
H28.1.1	竹内 正人	採用	キッコーマン総合病院小児科部長より健康解析学薬剤疫学特定講師へ
H28.1.1	佐藤 格夫	採用	救急部講師より救急部准教授へ

会 員 計 報 （敬称略） 謹んでご冥福をお祈りいたします。

新島 裳一 昭和19年卒 赤堀和一郎 昭和20年卒 山田 正敏 昭和20年専卒 戸口 延彦 昭和21年業卒 小林 政博 昭和22年卒 高木 博司 昭和23年卒 永田 誠 昭和23年卒 菅澤 亨 昭和23年専卒 柴田 和秀 昭和23年業卒 白木富士夫 昭和24年卒 金谷 治男 昭和24年卒 赤井 卓三 昭和24年専卒 山添 善朗 昭和24年専卒 角谷千代雄 昭和25年卒 笈 鎮郎 昭和27年卒 中村 健 昭和27年卒 石黒 稔 昭和28年卒	平成27年2月5日 ご逝去 平成27年3月24日 ご逝去 平成27年3月18日 ご逝去 平成27年7月25日 ご逝去 平成27年10月24日 ご逝去 平成27年11月17日 ご逝去 平成27年11月6日 ご逝去 平成27年12月24日 ご逝去 平成27年9月3日 ご逝去 平成27年12月24日 ご逝去 平成26年12月30日 ご逝去 平成27年4月2日 ご逝去 平成27年10月3日 ご逝去 平成27年8月31日 ご逝去 平成28年1月16日 ご逝去 平成27年8月30日 ご逝去 平成27年10月29日 ご逝去	市谷 迪雄 昭和28年卒 益子 尚彦 昭和29年卒 北川 修三 昭和29年業卒 荒木 昭博 昭和30年業卒 津田 宗孝 昭和31年卒 山本国太郎 昭和31年卒 渡辺 謙 昭和31年卒 植木 稠雄 昭和32年卒 笠倉 新平 昭和33年卒 宗行万之助 昭和33年卒 安沢 良一 昭和33年卒 野田 尚子 昭和33年業卒 田部井 亮 昭和34年卒 中野 博 昭和35年卒 大塚 俊史 昭和36年卒 田崎 正善 昭和37年卒 松本 雅彦 昭和39年卒	平成27年12月5日 ご逝去 平成27年7月13日 ご逝去 平成27年8月30日 ご逝去 平成27年8月26日 ご逝去 平成27年7月13日 ご逝去 平成27年10月10日 ご逝去 平成28年1月11日 ご逝去 平成27年9月4日 ご逝去 平成27年8月24日 ご逝去 平成27年9月11日 ご逝去 平成27年9月17日 ご逝去 平成26年9月16日 ご逝去 平成27年12月15日 ご逝去 平成27年11月10日 ご逝去 平成27年9月24日 ご逝去 平成27年10月6日 ご逝去 平成27年6月2日 ご逝去	光藤 和明 昭和49年卒 安里 令人 昭和50年卒 大石 賢二 昭和50年卒 堀井 泰樹 昭和54年卒 早石 修 教室会員 医化学 伊東 恒生 教室会員 産婦人科 大石 穰 教室会員 産婦人科 金子 義雄 教室会員 産婦人科 田辺 正也 教室会員 放射線・核医学 井上 幸重 教室会員 ウイルス研	平成27年10月18日 ご逝去 平成27年8月18日 ご逝去 平成27年2月 ご逝去 平成27年8月 ご逝去 平成27年12月18日 ご逝去 平成27年6月15日 ご逝去 平成27年10月20日 ご逝去 平成27年7月14日 ご逝去 平成27年4月11日 ご逝去 平成26年12月21日 ご逝去
---	---	---	---	---	--

訂正とお詫び 芝蘭会報第186号（前号）6頁の人事異動（左上から4人目）の氏名、会員計報の鈴木康正氏のご逝去年に誤りがありました。会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びするとともに、次のとおり訂正いたします。
誤「園部 純也」→正「園部 誠」 誤「鈴木康正 昭和50年卒 平成26年2月1日 ご逝去」→正「鈴木康正 昭和50年卒 平成27年2月1日 ご逝去」

原 稿 募 集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場です。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会でご決めさせていただきます。

芝蘭会報 編集委員会

●事務局から●

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますのでご了承ください。（FAX 075-752-4015）

管理課長 浜崎康博	総務課長 秋山和美	事務局長 山田 均	芝蘭会事務局 希、谷本将崇（1回生） 生）加古敦也、松本一 回生）吉平智博（2回 剛史、蔡 嗣錡（以上3 上大吉、菅原聡真、朴 西川裕太、中田 愛（以 4上4回生）梅本大地、井 太陽、赤埴未宝、大植啓 史、小杉大輔、坂本 慧、宮崎規晶、阪原宏規 （以上5回生）高屋龍生、 （以上5回生）高屋龍生、	顧問 高折晃史 部 員 鶴田将史、真辺 諄（以上6回生）森山 征良、豊田伸哉、山田圭 介、園部 誠、阿部 恵 委員 斎藤信雄、岩田 委員 高折晃史 芝蘭会報編集委員会
-----------	-----------	-----------	---	--